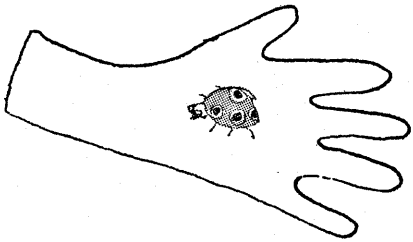
近代短歌に現われた子ども（十八）



大塚　雅彦

(39) 中野菊夫

中野菊夫は明治四十四年、東京・渋谷に生まれた。生家は花つくりをしていた。国士館中学を経て昭和十一年多摩美術学校図案科を卒業、母校国士館で図画教師をし、図案家となる。美校時代に東洋美学の金原省吾や日本画の平福百穂、図案の杉浦非水等の指導を受けたという。一時、美術団体に加わったり、師の美術評論家大隅為三の助手として中国に渡ったりした。戦時中は陸軍参謀本部の海外宣伝機関である東方社に編集部の一員として勤めた。戦後は文筆家として活躍し、今日に至っている（その経歴については東京新聞編『私の人生劇場』〈昭43・3〉所収の自叙的な文章に、面白く描かれている）。

彼は中学在学中の昭和二年、啄木を読んで惹かれ、作歌を始めた。茂吉の作品にも親しんだ。在学中から小歌誌を出していたり、特定の師に就くことなく、ほとんど独学で歌風を築いたという。昭和七年鈴木北渓らと「短歌街」を創刊したが、同九年別れて「七葉樹」を創刊した。昭和十八年の歌誌総合で他誌と合併し「八束穂」を創刊編集したが、四号で休刊した。昭和十年代から戦中にかけて明治初期短歌史――特に桂湖村・福本日南・陸羯南等のいわゆる「日本派」の人々の研究をし、日刊大民新聞に天田愚庵研究を連載したり、更に与謝野鉄幹にたどりつき、後に鉄幹に関するすぐれた研究を発表するようになる。戦後の昭和廿一年、渡辺順三を助けて「人民短歌」を編集。また、翌廿二年には「新歌人集団」の結成にも参加した。のち「人民短歌」（「新日本歌人」と改題）の公式主義にあき足らず、これを離れる。昭和廿六年、歌誌「樹木」を創刊主宰し、今日に至っている。また、彼の人柄からか、日本歌人クラブの結成に寄与したり、日本歌人協会の常任理事を長くしたり、歌壇の多くの企画や会合で常に世話役のような立場を引受けたりする。全国のハンセン氏病（癩）療養所を行脚して患者の歌人たちの指導をしたり、彼等の歌集を編んだり、被爆関係者や職場の勤労者の短歌を指導したり等のヒューマンな感情にもとづく行動や、死刑囚救援運動をする等の政治・社会への関心、正義感から出る文学活動・社会活動等も多く、誠実な歌人である。歌集は初期の『丹青』（昭18）、『幼子』（昭24）、『風の日』（昭29）等から最近の『鷹とリス』（昭52）、『前夜』（昭53）、『集団』『朱雀抄』（共に昭55）、『冬の魚』（昭56）等に至るまで八冊ある。合同歌集『新選五人』（昭26）や自選歌集『水色の皿』もあり、また前述の如く療養歌集『試歩路』（昭29）『陸の中の島』（昭31）の編さん、選歌等の業績も見逃せない。研究書として『太田水穂の秀歌』（昭51）、『わが愛する歌人』第四集（合著、昭47）等があり、自叙伝的な前述の『私の人生劇場』（合著、昭43）もある。啓蒙・入門書的なものとしては『現代短歌の世界――作歌と技法』（合著、昭51）、『短歌のこころ』（合著、昭54）等

がある。エッセイ、随筆等のすぐれた文章も多い。

中野の作風は、広い意味のリアリズムを信奉しているだけに、率直で明快であり、晦渋でなく、虚飾や誇張や冗舌を排し、ことばの凝縮と単純化を心掛け、「地味、平明、単彩をえらぶゆき方」であり、また、都会人風な良識や清潔さに溢れ、批判精神に富み、卑俗や通俗を嫌い、純度の高い抒情がある（短歌新聞社編『評論集・現代歌人百人』〈昭37・11〉所収、拙稿「中野菊夫論」参照）。

①妻が植ゑし大切な葱をぬきてきぬこの幼子らかくて育ちゆけ

②みどり子はものを言はねば抱き上げて日に向けやれば目を細くせり

③妻あてに送りくる小包ときにあり食品なれば子も声をあぐ

④死にし子をみづから土に葬りて引きあげし君とも今日めぐり逢ふ

⑤目の清き幼子と思ふゆきすぎてふりむきたきをふりむかず来ぬ

⑥銀色に光れる茅花声立てず癩少年ら棒とびしをり

⑦鼻緒問屋の鼻緒のなかにうづもれて膝を正しく少年坐る

①は歌集『幼子』の冒頭「幼子」一連の中にある。この歌集は昭和廿一年末から廿二年半ばまでの作品を収めているから、この歌も終戦直後の作で、製作背景がわかる。食料も乏しい時代で、夫人がすこしでも食料の足しにしようと、庭の隅にでも葱を植えたのだろう。ところが腕白な幼児はいたずらしてそれを引抜いてしまった。作者は苦笑しながらも、子どもの元気さをたのしく思い、逞しい成長を切望しているのだ。下句が作者の人柄や父情をよく現わしている。この歌の前に「友の子とわが子と分けて一本のミルク飲むさまを妻と見ほるる」があるが、この歌にも当時の世相と、子どもたちの動作をむしろたのもしく思って眺めている作者夫妻の心情がにじんでいる。②もやはり『幼子』の「日日」一連にある陽の下に佇つ或る父子像という感じで、清純であたたか

い作品である。「みどり子が日にまむかひて目を細めみつめてゐるよ日に向けてをく」という歌が続いている。③も同書「身邊」一連の中にある。「妻あてに」というから、夫人の実家あたりからでも送って来たのだろうか？　それが食品とわかって喚声をあげる子ども。これと似た経験は、戦後の物資乏しかった時代に子どもを育てた者は、みな持っている。状景の髣髴とするような歌である。同じく食料をめぐる親子像を示すものに、歌集『風の日に』所収の「押し麦を袋より器にうつしをり幼子もわれも沈黙のまま」という作品があり、すこし歌の内容の雰囲気が違うが、これはこれでまた、巧みな叙述で状景がよく現われている。「押し麦」など今は食べる人も少ないだろうが、私の田舎の小学校時代には、級友たちの多くが弁当にこの「押し麦」の飯を持って来たものである。④は『風の日に』の始めの方にある。この「君」というのは女性のようだ。敗戦の引揚げ行(こう)には、この歌の内容のような悲劇が少なくなかった。藤原ていの『流れる星は生きている』は、主婦の満州からの脱出引揚げの体験記録であり、その苦難のさまが綴られているが、かくいう筆者も捕虜生活から復員の折に満州の野を歩き続け、一緒になった女性からこの種の悲痛な体験を聞いた経験がある（安田武編『日本人への遺書』〈昭42・8〉所収、拙稿「虚しき暦――わが歌日記」）。作者は外地から引き揚げてきた古いなじみの女性に逢い、この悲惨な体験をきき、胸をうたれているのであろう。⑤は歌集『新選五人』の「母子寮」一連にある。一連を読むと、作者は幼児を連れて母子寮の近くを通ったらしい。すると、たまたま目の清い幼子を見かけた。「可愛いいな」と思い、もう一度振り向いてみたいと考えたが、それを抑えて通り過ぎて来た、というのだ。下句はなかなか複雑な心境である。父である自分と一緒に歩いているわが子と較べて、父の居ない母子寮の子どもの哀れさを想いやったのであろうか？⑥も同書の「もぢずりの花」一連にある。前述の如く作者は屢々癩園を訪れ、癩を病む歌人たちを指導し、激励しているのであるが、この歌もそんな折の作である。茅花が銀色に光っている

庭で、癩園の少年たちが声も立てないで棒とびをしている光景に、胸うたれているのであろう。「少年ら松の林に遊べどもふりむくとせずみな癩を病む」という歌が続いている。⑦は歌集『前夜』の「駒形あたり」一連にある。冬の東京・下町の大川端あたりを作者は歩いていた。たまたま鼻緒問屋の前を通ると、職場で鼻緒に埋もれるようにきちんと膝を正して少年が坐っている、というのである。この店の徒弟奉公している少年店員であろうか？　少年を愛する作者のヒューマンな心情が、読者につたわってくる。「膝を正しく少年坐る」という一語が、真面目そうなこの少年の健気さと、作者の好みとをよく滲ませている。安池敏郎氏はこの下句の把握から、「作者自身の端正な性格が感じられる」と述べている（加藤将之編『戦後歌人論――現代短歌二十人』〈昭50・4〉所収、安池「中野菊夫私論」）。

(40)　山本友一

山本友一は明治四十三年、福島県信夫郡清水村（現福島市御山）に生まれた。農業の父は間もなく満鉄に入社したため、母と共に渡満した。小学校途中より帰国、県立福島中学を卒業。上京し出版会社に勤めた後、昭和六年渡満、以後終戦まで軍用鉄道建設に従事する。この間、再度にわたり応召。終戦直後、国共内戦の兵火のもとで強制労働などさせられ、苦艱を嘗めた後、引揚げた。その後、東京で排水管工事業、真田紐製造業や印刷業等を営んだが、経営のための業苦をつぶさに経験する。昭和卅二年角川書店に職を得、宣伝課長になったが、四十八年に同社を去った。のち九芸出版社を興し、こんにちに至っている。

友一は中野菊夫と同様に、中学時代に啄木を読んで作歌を始め、友人らと同人誌を創刊し、さかんに詩文をつくり、また、「福島中学校短歌会」を結成して短歌に熱中したという。中卒後「短歌雑誌」に投稿し、その機縁で昭和四年「国民文学」に入社し、松村英一に長く師事し、同誌の同人となる。戦後は、宮柊二・近藤芳美・大野誠夫・中野菊夫ら今迄述べて来た人達と共に「新歌人

集団」に属して活躍した。昭和廿八年、香川進らと「地中海」を創刊し、中心の一人として今日に至っている。歌集は『北窓』(昭16)、『布雲』(昭25)、『黄衣抄』(昭28)、『萬春』(昭33)、『九歌』(昭42)、『長謡』(昭49)、『日の充実』『続日の充実』(昭57)の八冊があり、最後の二冊は現代歌人協会賞を受けた。この他、前述の合著歌集『新選五人』(昭26)には山本も名を連ねているし、また自選歌集『百牛志』(昭46)もある。編著として『私の短歌入門』等もある。

山本の歌の特色は「国民文学」社の方針ともいえる現実的歌風であり、生活詠が多く、記録性も強い。茂吉の影響も強く受けているだけに着実で、自我の主張がはっきりしており、強靱で、足の地についた剛直で明快なうたいぶりであり、倫理性にも富んでいる。軽佻浮華を排し、生活者の抒情を基調とする彼の信念と、東北人らしい質朴な性格や、幼少時から中国大陸で刻苦し堪え抜いた生活体験とが、渾然として一体を為しているのではなかろうか。リズムは古典的でダイナミックな抒情に富むが、一面ではやや古めかしい詠歎と感じさせる場合もあるようだ。

①著がへするときのあひだも股くぐりあそぶ吾が子にただなごむべし

②子らよりも早く目覚めてさ蠅らを追ひゐる今朝ははや兵ならず

③ひとつ寝にねに入る子らのその一人服をたたみて枕くあはれなり

④子のむつき取りかへながらあはれ言ふこよひふたりにて気づまりはなし

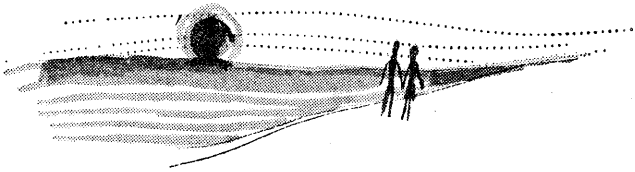
⑤所持金を首より下げて雨に立つ悲しさも早く子らは忘れむ

⑥妻子らがかたへにい寝てしづかなるわが夜となりぬ小机のまへ

⑦世を遠き思ひにも似て孫の爪剪(き)りをれば飛ぶ眉(まよ)びきの爪

①は歌集『北窓』より抄出。「歳晩貧涸」の一連の中にある。昭和十五年作で、この頃作者一家は満州の吟爾(ハル)

浜市内に住んでいた。この「子」は三才くらいになっていた長男一良だろう。多忙で外出がちの父親が帰って来ると、着換えしようとする束の間でも、その父親の股くぐりをして遊ぶ幼子に、たわいなく和む気持が微笑ましく詠出されている。②から⑤までは歌集『布雲』より抄いた。②は「復員」一連の冒頭の歌だ。昭和十八年作で、この年七月作者は召集解除になり、家に帰って復職した。朝目がさめて蠅（さ蠅の「さ」は接頭語）を追っている自分は、たしかにもう兵隊ではないのだと確認する安らぎは、兵役の体験のある筆者にも実感としてわかる。③は「傷心歌㈡」一連にある。「ひとつ寝」は同じ床に一緒に寝ることで、「浅春」の一連の中にも「子ら三人ひとつ寝にぬる夜は冴ゆれ冬も去なむとわれら語らふ」がある。「枕く」はまくと読ませ、㋑枕とする㋺抱寝する、等の意味だが、この歌の場合どちらだろうか？子ども達が同じ布団に寝るのだから、後者の意味か？服を寝押しするようにもとれるので、その場合なら前者か？　何人か居る子どもたちの中の一人だけがそんな動作することに、作者はあわれを感じたのだろう。それとも枕が足りないので服を畳んで枕代わりにしたのか？どうもいまひとつ、よくわからないが、面白い歌だ。④は「晩秋一日」一連の中の作。結婚十年目だと他の歌で詠じているが、昭和二十二年作で、祖国へ引揚げて子ども達を中にして、ようやく家族一緒に逢えた安堵感が、この淡々とした表現の一首に溢れている。夫婦水いらずの会話がきこえてくるようである。下句のズバリと言った断定が、却って余情を湛えている。⑤は「記録」大連作（二〇二首）中の「胡盧島岸壁」一連の中にある。悲しく辛い敗戦と汚辱の経験の果てにやっと外地から引揚げて来たみじめさ。僅かな所持金を袋に入れ首に下げて、雨にうたれて岸壁に立っているのである。しかし、その悲しさも、親のわれわれよりも子どもらは早く忘れるだろう、と自らを励まし、慰めているのだ。くしくも筆者もこの作者と同じく、満州を発って昭和廿一年秋、錦州の胡盧島から復員し、博多に上陸した。その体験は忘れられない。⑥は『黄衣抄』より抄出、「霜」一連に

ある。昭和廿四年作である。合著歌集『新選五人』にも収められている。前年の暮れに、引揚げてから福島に別居中の家族が上京して転入し、一緒になった。妻子が側に寝ていて、作者は小机に向っている静かな晩――やっと取戻せた平安なのである。作者には家族愛の歌が多く、良き家庭人であることがわかる。⑦は『長謡』より抄出。「心音」一連の中にある。これは孫の歌である。昭和四十三年作だから、この年、作者は還暦だ。四人の男の子たちもそれぞれに成育し、大学在学中の四男を除けば、皆社会人になっている。この孫は長男の息子か？作者はもう世の中のわずらわしさも遠いような思いで、愛孫の爪を剪ってやっている。爪が飛ぶが、その細く切った爪が眉引のようだという。眉引は眉墨で眉をえがき引くこと、また、その眉だ。万葉集などにもある古語で、美しい形容である。

（お茶の水女子大学）